

1. はじめに

本校がある地域「おくの」は、自然豊かで歴史のある地域である。そして本校は、コミュニティ・スクールとして、学校運営協議会を中心とした地域に支えられている。この恵まれた自然環境と地域人材を活かし、「地域と共に本校の子供たちを育てること」を核としESDを推進することで、本校児童生徒の「育成したい8つの資質・能力」(資料1)を高め、本校が目指す児童生徒像「地域を知り、地域に貢献する児童生徒」(本校グランドデザインより)、つまり持続可能な社会の創り手を育成することをねらいとしている。

本校が育成したい8つの資質・能力
①美しいものや崇高なものに素直に感動する力
②批判的に考える力
③未来像を予測して計画を立てる力
④多面的・総合的に考える力
⑤コミュニケーションを行う力
⑥他者と協力する態度
⑦つながりを尊重する態度
⑧進んで参加する態度

資料1 育成したい8つの資質・能力

(1)「総合的な学習の時間」における単元「ふるさとおくの」を柱としたESD

本校は、ユネスコスクールであった小・中学校が統合し、義務教育学校として令和2年度に開校した。総合的な学習の時間を柱とした9年間の系統的なESDの推進を重点に置き、教育活動を進めている。そして、その中心単元が「ふるさとおくの」であり、その活動の中で特に大事にしているのが「Think globally, Act locally」の理念である。前期課程1・2年では自然体験を、3・4年では自然への気付きを大切にし、5年からは海外の学校との交流、7年生からはアートマイルを通して地球規模の問題について考えたり、自分の国や地域と比較したりして、視野を広げていく。そして後期課程8年からは、自分たちの住む地域「おくの」へと視点を戻し、大切な「おくの」の課題を見出し、地域の一員として何ができるのか考え、行動へと移していく。これら一連の活動を通して、児童生徒の資質・能力を高め、将来「地域社会」を支え、貢献し、さらには持続可能な社会の創り手の育成へとつなげていくことを目指している。

(2)「つながり」を大切にした学校教育全体に広がるESD

9年間のカリキュラムを系統的なESDの柱で1本太くつなぎ、効果的なカリキュラム・マネジメントを学校全体で意識して行った。同時に、教職員だけでなく、学校運営協議会を中心とした地域の人的・物的資源とのつながりを大切にしていくことで、一層の児童生徒の資質・能力の向上を目指した。そして、委員会活動や学校行事など、様々な教育活動へとつなげていくことで、本校の教育活動全体にESDが広がり、根付いていくことを目指している。

2. 実践内容

(1)「地域と共に子供を育てる」、地域に支えられたESD

本校のESDは、学校運営協議会をはじめ地域の人的・物的支援に支えられている。しかし、それらの多くがイベント的・単発的なものであり、児童生徒の資質・能力を確実に高めていくためには、地域の方たちにも本校のESD推進のねらいの理解・共有が重要であるとして、令和6年度末の学校運営協議会で、令和7年度の教育活動に向けて改善を図った。手立てとして、学校長が「地域とのつながりを大切にし、共に子供を育



資料2 学校運営協議会で各学年の視覚的カリキュラム表の共有を行っている場面

てていきたい」と説明し、その後、教頭が資料2のように視覚的カリキュラム表の説明を行い、各学年の教育活動の共有を行った。その後「子供にどんな力を付けさせたいのか」と各学年主任と地域の方と令和7年度に向けた人的・物的体制について話し合いが行われた。その後も定期的に見直し、改善を行っている。

(2) 各学年のESD取組の実践（一部）

①前期課程1・2年…おくのの自然を感じる

本校のESDのスタートとして、1・2年生は、おくのの豊かな自然に十分に触れ、1年間を通して様々な活動から、自然を感じる学習を行う。

【1年生 生活科「いきものとなかよし」】

校庭で虫探しを行った。まず、これまでの経験をもとに、虫のいそうな場所の予想を立てた。実際の虫探しでは、予想を立てた場所だけでなく、活動範囲を広げ、夢中になって虫を探し、バッタ、トンボ、チョウなど様々な昆虫を見つけたことができた(資料3)。そして、虫のすみかを作り、実際に飼うことで、虫の様子を観察し、分かったことを伝え合った。単元の最後には、校庭の地図に、見つけた虫を描いたカードを全員が貼っていき、「おくの校庭虫マップ」を作成した。完成した地図を見た子供たちは、おくのの自然の豊かさに改めて気付くとともに、大切にしていこうという思いをもてた。



資料3 虫探し

【2年生 生活科「生きものはっけん」】

生活科の時間に、自分たちの身の回りの自然に目を向け、自然や生き物を大切にしようと、生き物について詳しく調べる活動を行った。旧校舎の校庭で生き物を探し(資料4)、飼育する活動を行う中で、飼い方を教科書や図鑑で調べたり、生き物を見つけた場所の様子を思い出したりして、生き物にとって暮らしやすい住み家や食べるものを考えることができた。生き物に優しい気持ちで接し、大切に育てている姿が見られた。

それらの活動を通し、自分たちで観察、飼育した生き物についてまとめ、伝え合うことで、地域の生き物を大切にしたいという思いや願いを高めることができた。



資料4 生き物探しの様子

②前期課程3・4年…身のまわりの自然への気付き、様々な関連性、SDGsの基礎的な学習

【3年生「調べよう!おくのの自然」】

自分たちにとって一番身近な校庭の自然を季節ごとに観察した。校庭で見つけた様々な動植物について一人一人が詳しく知りたいことをテーマとして設定し、図書資料やインターネットを活用し、調べ学習に取り組んだ。調べたことは、タブレットを活用し、まとめ、発表し合った。自分のテーマを調べたり、互いの発表を聞いたりする中で、校庭の自然の豊かさや季節による変化に気付くことができた。NPO法人アサザ基金の方にもアドバイスをもらい、様々な視点から生き物たちのつながりについても考えた。さらに、学校周辺の自然についても調べてみたいという興味関



資料5 調べたことをタブレットで発表

心につながった。(資料5)

【4年生「守ろう おくのもの自然」】

学校の近くにある、ヤマユリの会の方が管理している森で、年間を通して自然観察を行った。(資料6) また、森にヤマユリの球根を植える活動を行った。すぐに咲く花ではないため子供たちも成長を楽しみにしながら植えていた。ヤマユリの会の方々から、ユリをはじめとする森の動植物について森での自然観察を通して教えていただいた。動植物に対する知識を深めることができた。自然を守るために自分たちにできる活動を考え実行していこうという意欲を高めた。(資料6)



資料6 おくのもの森観察
ヤマユリの会のお話

③5・6年・7年…地域のくらし、課題を地域と共有・提案、そして海外との交流スタート

【5年生 守れ!おくのもの歴史】

地域の方から話を聞き、奥野地区には歴史的に貴重な寺や神社、伝統的な行事があることを知った。しかし、人口減少・過疎化により、それらを守り、継承していくにはどうしたらよいかという課題意識をもった。地域の方との歴史探訪を通して、「奥野地区の歴史を再発見し、地域のために自分たちができることを実践する」というテーマのもと、アイディアを出し合い、活動を進めているところである。(資料7)



資料7 金剛院 団子念仏

【6年生 台湾との交流】

6年生は、台湾との交流として音楽を通じた交流を行った。日本で有名な曲を学年で話し合い、お互いに合奏の発表をし合い、感想等の交換を行った(資料8)。交流を通し、相互の文化の相違を感じ、理解を深めることができた。その後も、道徳の授業で台湾との交流について話題がでるなどつながりをもって取り組んでいる。今後はそれぞれの国の職業についての情報を共有し合ったり、それぞれの国の特徴的な職業について詳しく調べて報告し合ったりする予定である。子供たちは「すし職人」「和菓子職人」「歌舞伎」など自分たちの国の職業についても興味を示している。日本独自の職業を調べ、今後、キャリア教育の一環として交流を行い、台湾との共同作品として職業に関する本を作成する予定となっている。



資料8 台湾と日本の
音楽交流

【7年生 アートマイル国際協働学習】

7年生は、アートマイル国際協働学習に参加しており、2025年度はエチオピアの学校と交流を行った。交流では、お互いの国や生活している地域の課題について共有し、持続可能な社会を作り上げていくためにはどうすればよいかを一緒に考えた。交流が進む中で、エチオピアと日本それぞれの抱える社会問題を踏まえ、どちらの問題も持続可能な社会の実現には重要なテーマであると捉えた。交流における話し合いを経て、持続可能な社会の実現に向けての思いを、協働作成の絵画で表現する予定となっている。(資料9)



資料9 エチオピアと日本の
オンライン交流

④8・9年生…課題を地域と共有・提案、地域社会との協働、持続可能な社会の担い手へ

【8・9年生 地域との連携】

後期課程8・9年生では「Act locally」へと視点を戻し、「SDGs 目標11 住み続けられるまちづくりを」につなげた学習を進めていく。9学年では実際に、地域との交流など前期課程までに培った資質・能力を生かし、そして地域の方と共に改めて「おくの」の課題を明らかにしていく活動を行った。(資料10)



資料10 後期課程「地域のりんご園」
のりんごを活用したリンゴパイ実習

(3) 本校のESDを支える国際教育・英語教育

ユネスコスクールとして、「Think globally, Act locally」の理念のもとESDを推進するためには、国際教育・英語教育も重要である。したがって、本校では、次のような教育活動も推進している。

①前期課程 イングリッシュタイム

前期課程では、英語に慣れ親しむことができるよう、外国語・外国語活動の授業とは別に週3回15分のイングリッシュタイムを設定している。これは、地域ボランティアの方の支援によるものである。

②1・2年生 ワールドキャラバン国際理解教育

本年度は、中国出身の方を講師として招き、授業を行った。外国の文化や生活について理解したり、海外への関心を高めたりした。

③3・4年生 JICA 筑波国際協力出前講座

本年度は、JICAからボリビア派遣経験のある方を講師として招き、授業を行った。世界には様々な文化や生活、思考があることや、世界が抱える問題や国際協力について考えを深めることができた。

④前期課程から海外との交流スタート

児童生徒が世界的な視野で物事を捉えることができるように、2015年度より、海外の学校と交流を行っている。本年度は7年生がエチオピア、5・6年生・9年生が台湾との学校と交流を進めている。

⑤8年生 プリティッシュヒルズ外国語研修

福島県にある「プリティッシュヒルズ」において、外国語宿泊研修が行われた。英国の建築様式や生活様式、調度品に触れ、本物を見たり体験したりすることを通して異文化理解を深めた。そして、英国圏の外国人講師や現地スタッフとの英語による日常会話やレッスンをを通して、言語活用・運用能力の向上を図った。(資料11)



資料11 プリティッシュヒルズ外国語研修

(6) ESDの学校全体へのつながり、広がり

ここまで述べた一連の ESD 推進のための教育活動は学校全体でつながり、様々な活動へ広がりつつある。ここでは、その一部を紹介する。

①9年生 地域貢献(持続可能なまちづくりに向けて)

これまでに培った、「Think globally, Act locally」の理念の下、9学年では『ふるさとおくのに貢献する～住み続けられるまちづくりのために～』のテーマで課題研究を行っている。生徒の興味関心から、【なぜ京都は観光地として発展しているのかの調査】、【地域の活動への積極的な関わり】、【地域の観光資源を生かしたPR活動】など、様々な活動を行っている。これらの活動も、地域から国際社会に視野を広げ、さらに地域に目を向けるという一連の学習があってこそその積極的な取組であると考ええる。また、地域の絆づくりと活性化を目的とした地区社会福祉協議会主催による「おくのふれあいまつり」での実際のボランティア活動を通して、地域に貢献する実践的な態度が養われている。

②教職員研修を生かして

年度始めには、新しく本校に赴任した教職員に対して、そして1年間を通してどのように ESD を推進していくのか確認の意味も含めて、総合的な学習時間〈ESD・SDGs〉研修を行っている。学校全体についてだけでなく、学年ごとにも学年主任を中心に方針や流れを確認している。さらに、研修では、全教員でカリキュラム・マネジメントの意義や有用性を確認し、実際に視覚的カリキュラム表をもとにカリキュラム・マネジメントの可能性の見直しを行っている。令和7年度は、令和6年度に見直したカリキュラム表を実践してきた。本校が推進している SDGs に関する取組を視覚的に見える化することで、9年間の系統的な学びがより効果的になるように、カリキュラム表を工夫している。各学年・各教



資料12 視覚的カリキュラム・マネジメント表の見直し

科だけでなく、学校全体で教育活動のSDG sの関連性の確認により、ESDの取組をさらに充実させていくことを目指した。(資料12)

4. 成果と課題

(1) 保護者学校評価アンケートより

質問内容	そう思う
1. 学校は、ユネスコスクールとして、SDG sに関する学習活動を積極的に取り入れている。	81.2%
2. 学校は、環境教育と郷土教育等の充実に努めている。	89.5%
3. 学校は、英語教育と国際教育の充実に努めている。	84.9%
4. 学校は、コミュニティスクールとして、教育活動や学校運営などに関して保護者や地域と連携・協力した教育活動に取り組んでいる。	81.2%
5. お子さんは地域や社会をよくするために、「自分自身に何ができるか」を考えたり、話したりすることがある。	45.1%

(2025年1月 保護者実施)

【資料13 学校評価アンケート結果(一部抜粋)】

資料13の質問1～4の結果から、保護者に80%以上と一定の評価が得られていることがわかる。しかし、5については課題であり、これは児童生徒の高めたい8つの資質・能力③、④、⑧と関連が大きい内容である。今後も、これらの成果と結果を生かし、児童生徒の育てたい8つ資質・能力の向上を目指し、地域との連携を重ねながら、本校のESD・SDG sの取組の改善を続けていきたい。

★活動計画2026(令和8年)の活動計画

今年度の活動を踏まえ、来年度に向け見直しを行い、見直しをした活動の実践を地域の方と一緒にしていく。2025年度末の学校運営協議会において、2026年度の活動を各学年主任と地域の方と一緒に振り返り、見直しを行う予定である。その際、本校が推進している総合的な学習の時間を柱としたESD・SDG sの取組の見直しから、改善を行い、次年度2026年度のよりよい活動へとつなげていきたい。

また、並行して、次年度の教育課程検討委員会の総合的な学習の時間部会において、次年度の年間計画の見直しを進めている。児童生徒にとってより探究的な活動となるよう、またさらに系統的になるように、各学年のテーマとする内容の精選を行っているところである。また、児童生徒および教職員、そして保護者のアンケートを生かし、児童生徒の育てたい8つの資質・能力を高め、持続可能な社会の担い手を育成していきたい。